

特集：短大保育科の歴史から

—保育者養成を支えた教師陣—

飯島 千雍子

短期大学保育科は1950年、短期大学制度発足の年に誕生した。上田保姆伝習所に始まり東洋英和女学院附属保姆養成所、附属幼稚園師範科、幼稚園師範科、東洋永和保姆養成所、保育専攻部と続いた保育者養成の発展したものである。中心となった教師は婦人宣教師で、教育関係ミス・キュックリヒ、保育関係ミス・スクルトン、宗教関係ミス・ロック、初代保育科主任ミス・ハミルトン、そして作曲家大中寅二、舞踊家山崎竜子、二人の専門家を迎え、兼任講師陣には、東京大学の岡部彌太郎教授（教育心理学）、中央大学の市川秀雄教授（日本国憲法）、村岡花子（児童文学）、長野静江（図画工作・絵画制作）など錚々たる名前が並んでいる。充実した教師陣による教育を目指す伝統は上田以来のものである。

上田保姆伝習所の教師について、『東洋英和女学院保育者養成のあゆみ』は「まず婦人宣教師たち：保育に関する最新の知識と経験を有し音楽・美術・体育などの素養を持つ者。通訳者として優れた能力と人格を持つ本学院（女学校）の卒業生。そして聖書と保育以外の教科を担当する地元旧制中学の教師たち」と記し、「重要

な保育の教科目を教えた婦人宣教師たちの存在自体がhidden curriculum（隠れたカリキュラム）」となり、人格と専門性の統合的育成が理想的に成立していたと推察している。1919年に付属幼稚園保姆養成所が新設され上田保姆伝習所は発展的解消を遂げたが、その理由は講師の人材不足であったという。

婦人宣教師たちは賜暇で帰国すると大学で研修し、上級の資格や学位を取得している。婦人伝道会社のもとにあった日本人の幼稚園教諭のための国内研修制度の記録もある。短期大学も留学制度・研修休暇制度を設け、教員の研修を奨励していた。1997年にその幕を降ろすまで短期大学の教育を担った教師陣の名簿からは、充実した教育内容と資質の高い保育者養成をめざした篤い思いが伝わってくる。

「カナダ・メソジスト教会の最初の幼稚園、長野市の旭幼稚園はフレーベル主義の保育を長野県に持ち込んだ」と塩入隆氏は『信州教育とキリスト教』に記しているが、上田保姆伝習所の教育も「恩物手芸」（恩物手芸原理、恩物手芸実地研究 8時間）、「理科」（地質学、動物学、植物学）などの教科目からフレーベル主義に立っていたことは明らかである。（恩物については5～6ページに写真付きで紹介する。）

第2代所長ミス・ドレークはシカゴにあるフレーベル革新派の保母学校に学び31歳の若さで来日、最新の教育を与えるため英文教科書を使用するなど若い魂を大いに鼓舞した。1919年開設した東洋英和女学院附属保姆養成所では、岩村清四郎（教育史）、青木誠四郎（心理学 東大教授）、土川五郎（「律動表情遊戯」麹町小学校長）の名前がある。第3代所長ミス・ステープルスの時代には「教育の新傾向に対応すべく、リトミック講習会、栄養・衛生分野の特別講義を設けて充実を計った」と百年史は記している。



絵本をよみかせる実習

1933年の教育課程には「リトミック・幼稚園遊戯律動」3時間が設定されている。リトミックはダルクローズによって創案された新しい音楽教育の実践である。

後に短期大学で舞踊家山崎竜子は個性的で質の高いリトミック教育を展開した。また、作曲家大中寅二は保育者養成教育の音楽教育で作曲を教え、教えを受けた保育者は保育の中で子どもたちとうたう歌を作る。専門性を具えた保育者養成で先駆的なことである。各分野で優れた講師陣の薫陶を受けた学生たちは、偉大な教師に物怖じすることもなくのびのびと個性的な保育者として育ち各地に遣わされた。

次に短期大学草創期に学んだ卒業生の記憶に今も鮮明な教師の姿と授業内容を紹介する。



長野静江先生の授業風景

★長野静江先生〔図画工作〕〔在職 1934～1971〕

柿の木坂幼稚園主任

いつも和服姿で、色調のよいことを「お気持ちが良い」と言われたが、その着物と帯はまことに「お気持ちが良い」かった。保育者は幼児の前で常に自分の服装にも心を配り、子どもの気持ちを良くすることが大切だと言われた。また、ぬり絵を子どもに与えてはいけません、既成概念を押しつけないようにとの教えに感銘を受けた。

先生の授業の中で大きな位置を占めていたのはグリーンボードを飾ることであった。保育室にあったグリーンのフェルトの布が貼られた黒板のようなボードに、古い包装紙をちぎったり紙ひもを開いたりして「絵」を創作して虫ピンでとめる。グループ毎に担当し季節に合わせた豊かな雰囲気には飾り付けた。

ある夏休みの宿題は紙芝居製作であった。物語も枚数も自由。台紙は英字新聞紙で大きさは新聞紙片面大。古い包装紙や綿・布きれ・ひもなどを自由にちぎり英字面のバックに貼ることで創作画面を作り調和の取れた縁取りを施し紙芝居を完成させた。英字新聞は字が揃っていてバックに適していた。

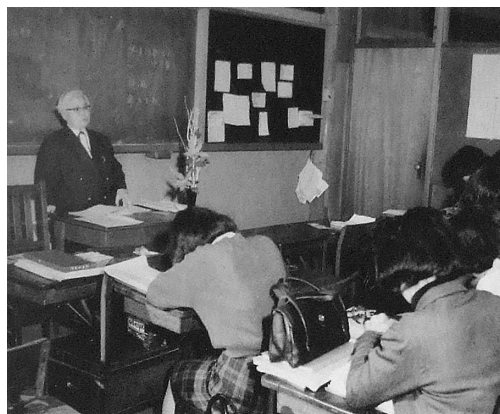
本物の美術を見るようにお勧めになり、ご本人もエジプト展で見た感動を、白い帯に墨で描き、藍色のお着物に合わせて着てお出でになり、「本物はこうやって模倣しても、良いものは良いでしょう」と見せてくださった。

★佐藤初重先生（両親教育）〔在職 1954～1975〕

柿の木坂幼稚園園長

「子どもの教育はそのご両親からなされなければなりません」キリッとしたその口元から出るお言葉に学生たちは「フムフム然り！」と聞き入った。

七・三に分けられたショートカットの白いお髪、お背は少し低く、恰幅のよい反り身のお姿で、いつも紺色の剣袷ダブルの背広姿。男性と同じ白ワイシャツに蝶ネクタイ、安定感のあるよく磨かれたお靴も印象的であった。



佐藤初重先生の授業風景

★村岡花子先生（児童文学と言語指導）

〔在職 1956～1966〕

色白の頬を紅潮させ、和服姿で汗を拭きながら教室に入って来られる。急いで来られたのではないかと思う。絵本は当時キンダーブック（フレーベル館）が主流だったが、ある日先生はマンロー・リーフの「みんなの世界」（岩波書店）を読んでくださり、この本は子どもにゼ

ひ読み聞かせたい良い本だと紹介された。

ある時はお話の仕方について話された。みんなが良く知っている「狼と少年」の話。少年が村人をだますため、「オオカミが来た〜」と叫んで走るが、それを実際に大声で叫ぶのでは効果がない。顔の表情と小さな声で口を大きく開けることで大声の感じが出ると言われ、実際に語って見せて下さった。自分で試してみても確かにこの方法はより効果的だと納得した。

★山崎竜子先生〔体育実技〕

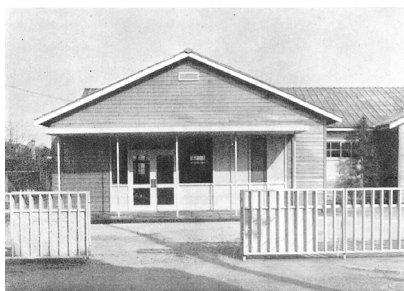
[在職 1948~1989]

細身で小柄な先生はいつも一直線を風に乗っているように軽快に歩かれる。授業は中高部の体育館（後に幼稚園ホール）で行われた。リトミックでは、音楽に合わせて身体運動をすることでリズムを学ぶ。基本は歩くこと。先生が中央に立たれ、私達はその周りに円をつくり、一列になって歩く。手足を真っ直ぐ上下左右に伸ばしながら足は四分音符、八分音符、符点の音符など教わった型通りに動かして歩く。ピアノの伴奏に乗ってただひたすら歩き続ける。「アンドウタタタ アンドウタタタ、ターンタタ ターンタタ」。たぶんピアノでいうと指の練習のようなものだったのであろう。

付点4分音符を「クロテン」と手拍子でリズムを取られたが、当時黒田成子教授を私たち学生はひそかに「クロテン」とあだ名で呼んでおり、その「クロテン」にくすくす笑っていた。やがて先生も事情が分かり、ニヤッと笑って「クロテン」と手拍子を取られた。



山崎竜子先生の授業風景



短大木造校舎

★鎌倉千槨先生〔音楽（器楽）〕

[在職 1945~1965]

入学試験では、示された四曲の中から一曲を選んで歌うよう指示され、一人ずつ部屋に入る。小さな部屋にはピアノが一台あり、その前に先生が座っておられた。「はい、歌って下さい」最初の音をポンと弾かれた。私は「伴奏はないのですか」とおたずねしたが答えはない。仕方なく歌い始めて終わると最後の音をポンと叩かれた。あっ半音下がってる！と思ったとたんに無表情で言われた「はい、終わりです」。私は部屋を出た。これが鎌倉先生との出会いであった。

入学を許され、鎌倉先生からレッスンを受けることになった。パステルカラーの柔らかい服装でほんのり香りを漂わせていられる先生だが、厳しいことで良く知られていた。一音一音を大切に、深く美しい音色をだすために肩から指先まで力を抜くよう指導された。何についても同じだが、力を抜くことを体で覚える迄は時間がかかる。緊張のあまり固くなって指先に汗がにじみ、黒鍵から指が滑り落ちるほどであった。時々先生は私の手首を横からそっと突かれる。力が入っているので手首は動かない。怒鳴ったり叱ったりされるのではないが、柔らかい音で弾けるようにならなければ、次の曲に進めない。他の先生からレッスンを受けている友だちはどんどん先に進んでいるというのに。しかし、二年生最後の実習園で、先生方から「あなたは千槨先生でしょう？」といわれた時は、あ、ようやくチマキサンの音が出せるようになったのだと思い、うれしかった。

思い出を語ってくださった村上祐子（1956卒旧姓長崎）さん、宮坂育子（同 旧姓瀬下）さん、勝山志づえ（1965卒旧姓高田）さん、高成田喜子（同 旧姓若柳）さんに感謝いたします。
（人間科学部教授）

〈思い出の先生がた〉17

大中寅二先生の思い出

宮坂 育子

50余年も前になる。母教会の礼拝における演奏で毎週奏でられていた大中寅二作曲のオルガン曲が先生との最初の出会であり、心にしみ入るその曲にすっかり魅せられた。

短期大学保育科で現実の先生にお会い出来たことは大きな喜びであった。ある日の「幼児音楽」の時間に「いつも吸収力を持っていないければいけない！」との先生の厳しい口調に学生達は姿勢を正された。「和声」を学び各自こどもの歌を作曲してくるようになっていた。その時、歌詞に付けるメロディー、それに付ける和音とその流れのことで、想像力・集中力、そして吸収力とを求められた。

幼な子をこよなく愛し、心を打つ多くの「こどもの歌」を創り、教えられたその歌の数々は今も心中で宝石のように輝いている。

先生のお傍には素晴らしい作詞者（深山澄子・葛葉国子他）歌い手、それに加え、身近には愛らしいお孫さん達、そして幼稚園・保育園等の、歌いつつ成長していく子ども達が保育科の卒業生を通し全国に大勢存在していた。春夏秋冬、思い出されるあの歌この歌は小さな虫や草花の中にも創造主を思わせ指さし、幼な子を育てる暖かな力を持っていた。それらの歌は何冊もの歌集となり出版されてもいた。

保育者になるうとする学生達の「うたの心」を育てる為に先生は美しく歌われる香代夫人をお連れになって自作の歌曲「梨の花」「子守歌」「椰子の実」等々を紹介され、歌心の扉を開いて下さった。当時短大の木造校舎には音楽室がなくそこは中高部の小講堂であった。

二年生の夏、麻布十番辺りの子ども達を招いた「子ども会」で、学生達手作りの絵ばなし「三匹の子ぶた」等を演じた時も中高部の小講堂のステージで先生作曲のピアノ曲で場面は展開した。今で言う「部活」まで時間を惜しまず学生達を大事にされ慕われた。

大中先生は赤坂の霊南坂教会のオルガニストを長きに亘りご奉仕された。また弟子達にリードオルガンの奏法をご自分の曲で教えられた。弟子達には保育科の卒業生もいて、先生の帰天

後、霊南坂教会で弟子達の演奏会が幾度も催された。そして今も教会の礼拝演奏者として、またリードオルガンの演奏者として活躍している方々もおられる。

先生が作られた曲はリードオルガン曲と子どもの歌だけではない。パイプオルガン曲・合唱曲・歌曲のほかにも校歌・社歌も多く1000を超える曲達は、1982年4月先生の帰天後奥様の香代夫人により全曲が整理され、現在その殆どが日本近代音楽館に保管されている。

1996年6月、先生の生誕百年を記念して1070を超える個人と団体により、あの名曲「椰子の実」の自筆譜が彫られた記念碑が伊良湖岬に建立された。島崎藤村の歌碑に向かい合って太平洋の海原を背に突出した岬の上である。

大戦末期に南方の島で兵士たちはこの歌を歌い望郷の思いに耐えたと記念碑の除幕式典の際に歳重ねた元帰還兵方が語り涙で歌われた。

その日、伊良湖の地で、ご子息大中恩氏・甥にあたる故阪田寛夫氏はじめ、地元の大学合唱部や地域の合唱団等により「椰子の実コンサート」が盛大に開かれた。「椰子の実記念碑」は地元渥美町の名所の一つになった。

素晴らしい歌や曲を残された先生に纏わる思い出は尽きない。あの縁なし帽、古カバン、そしてあの笑顔は今も心に甦る。

（保育科1956年卒 元短期大学・大学職員）

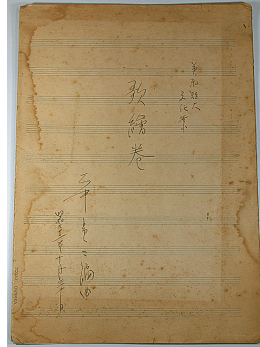


大中寅二先生略歴

1896年6月29日東京に生まれる
1915年 大阪府立北野高等学校卒業
1920年 同志社大学経済学部卒業
日本基督教団霊南坂教会オルガニストになる（～1979年）
1933年 東京高等音楽院卒業
1947年 東洋英和女学院幼稚園師範科（短期大学）非常勤講師に就任（～1979年4月）
1982年4月19日逝去（享年85歳）



伊良湖岬の「椰子の実」記念碑



大中寅二 作曲
「歌繪巻」(自筆楽譜)

1958年卒業の短大
保育科クラスのため
に、1957年文化祭に
あたって作曲してく
ださったもの。
2007年 史料室に
寄贈されました。



補足説明 〈恩物〉

ドイツの教育学者で幼稚園の創始者であるフレーベルが1830年代に考案した乳幼児用の教育的遊具および作業具。

造物主である神の似姿として生まれる人間が本来持っている創造性をはぐくむにふさわしい道具として神から恩恵として賜ったもの、という意味からガーベ (Gabe) と名づけられた。英訳はGiftである。20種類あり、自然界の法則を単純化した幾何学的な基本形一球、積み木のような円柱、立方体、直方体に始まり、板、棒、環、粒 (小石や種)、ひも、切り紙、畳み紙、折り紙などの素材で構成される。

たとえば第1恩物は、6色の毛糸でできたボールで、手に持って遊ばせるのにちょうど良いくらいの長さの同色の紐がついている。ボール(球)は最も完全な1個の全体、宇宙を象徴し、同時に最も単純で万物の基本的形態である。虹色に近い6色は平和、美の統一を表わす。



第1恩物：6色の毛糸でできたボール

これらの遊具を楽しく自由につかんだり組み立てたり分解したりして遊ぶことで、子どもはさまざまなことを学び、美に目覚め、世界の背後にある法則性、ひいては神に帰っていくとフレーベルは考えたが、そのためには適切な大人の遊戯指導が必要だった。

草創期の日本の幼稚園ではフレーベルの思想が一世を風靡し、上田保母伝習所でも開設当初はフレーベルの思想、「恩物」および「母の遊戯」の授業に多くの時間を設定している。さらに歴史としてフレーベル伝、ペスタロツィ伝、ルソー伝を教授している。



第1～6恩物



Bad Blankenburg
のフレーベル幼稚園
にて
(2008年3月フィール
ドワーク見学研修先)
第2恩物(球・円柱・
立方体)の碑が建てら
れている。

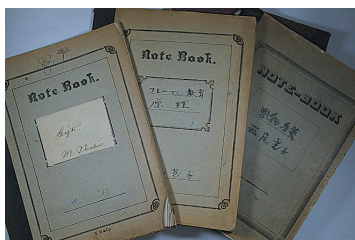
〈資料紹介〉 15

児玉光子氏寄贈 「恩物」作品集、授業ノート他

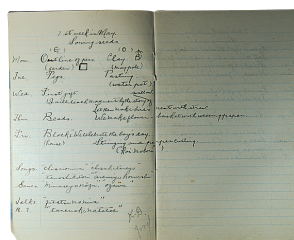
酒井 ふみよ



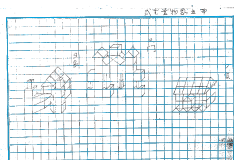
a



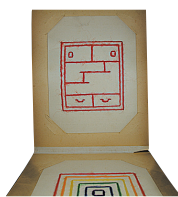
h



i



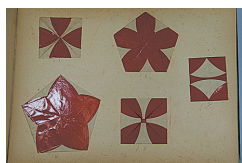
b



c



d



e



f



g

注：〈写真 i 内容〉

1st week in May	
Sowing seeds	
(G)	(0)
Mon. Outline of peas (garden)	(0) Clay (maypole)
Tue. Pegs	Painting (water pot)
Wed. First Gift	(I will teach movement by the story of swallow. Let them make bird's nest with straw.)
Thur. Beads	
Fri. Blocks (house)	Stringing and paper cutting (Koi Nobori)
We celebrate the boy's day.	
Songs	"Chisai oniwa" "Chisaki taneyo" "Tanoshiki tori" "Aremiyo komushi"
Games	"Mimaseyo nofu" "ogawa"
Talks	"futatsu no niwa"
B. T.	"Tanemaki no tatoe" Good K. D. (Bible Talk)

児玉光子(旧姓 西尾)先生は東洋英和女学校を1917(大正6)年卒業後上田保母伝習所に学び、卒業後は1919~1923年まで東洋英和附属幼稚園で教えられた方である。

史料室には、数冊の「恩物作品集」とも言うべきびょうぶ折りのアルバムと、児玉先生が熱心にまとめられた学生時代のノートなどが寄贈されている。

(なお、日本では、「恩物」というと第1から10までを指し、第11から20までを「手技(工作)」または「恩物手芸」とも呼び習わしたようである。)

- * 「恩物」第三より第八 (写真 a・b)
方眼紙に細かい鉛筆書きでさまざまな作例が記入されている。
- * 「恩物」第九より第十 同上。
- * (作品集) 縫い取り…第12恩物に相当 (写真 c)
- * (作品集) 畳み紙・織り紙 2冊 (写真 d・e)
…第14・15恩物に相当

- * (作品集) 切り紙…第16恩物に相当 (写真 f・g)
- * ノート 「恩物手芸」 (写真 h)
- * ノート 「G i f t」 (写真 h)

恩物それぞれの特徴、目的、教育的価値、使用法、注意など。

興味深いのは、第8恩物(棒)を「箸」としていること。また第10恩物(粒)は小石やさまざまな植物の種子を用い、外に出て庭でごく自然に子どもが手に取れるものが使われる。

- * ノート フレーベル教育原理 (写真 h)
- * ノート 「Program Book」 (写真 i)
幼稚園での実習計画が一週間ごとに英語で書かれたもの。毎日のように G i f t を用いていることがわかる。各ページにミス・ドレークのサイン(K. D.)があり、なかなかもらえなかったという「Good K. D.」のサインがたびたび見られる。
- * ノート (「母の遊戯」と思われる)
- * フレーベル著「母の遊戯及育児歌 上・下」
頌栄保母伝習所 訳・発行

(史料室)

学院史料展示コーナー 報告

学院史料展示コーナーは2007年秋に本部・大学院棟1階ロビーに開設されました。

これまであまり公開されることのなかった学院所蔵の史料・資料の数々を展示し紹介することで、学院の歴史をより身近に感じていただくことを目的にしています。

常設展示はミス・カートメルとマーガレット・クレイグ記念講堂の大きな写真入りで建学の精神をうたったパネル、歴史年表、そしてヴォーリズ設計の校舎模型の3点です。

初回は「土地の記憶—鳥居坂と東洋英和」、第2回は「なつかしの鳥居坂2番地」というテーマのもと、今日の英和の原型が定まったといえる創立50周年事業の記録資料、記念品、校章の変遷、寄宿生の生活用品、ミス・ハミルトンゆかりの食器、そしてミス・ハミルトンの形見のブローチが飾られるなど、一挙にさまざまな史料が日の目を見ました。多くの方々が見学に訪れてくださり、歴史の重みに感動を覚えられたようでした。

以上、開設のころについては『楓園』51号に紹介されています。



ミス・カートメルの聖書（左のケース内）

昨年11月の創立記念日の前後には、念願であった「ミス・カートメルの聖書」の公開を8日間にわたり行うことができました。創立者ミス・カートメルの細かい書き込み、美しい筆跡などを目の当たりにし、またその聖書が託された卒業生 齊藤春子氏の生涯などを通し、創立者の思いがぎっしりとこの聖書に込められていることを実感された方も多かったと思われます。小学部3年生や幼稚園の小さい方たちも見学に来られ、驚きの目を見張っていました。

続いて第3回展示「村岡花子と東洋英和」を

開始しました。

村岡花子と学院の関係については、史料室だより63号で特集してご紹介していますので、ここでは展示に関してのみ触れることにします。

展示内容の企画として①花子が東洋英和女学校で過ごした日々がどんなものであったか、また具体的にはどんなところが「赤毛のアン」翻訳に反映されたのかを視覚的にとらえやすくすること、②卒業後の学院との関わり—同窓会の副会長を務め、貴重な年史となった「五十年史」の編集に深く携わって母校に貢献したことをアピールすること、そして、何より③楽しんで見てもらいたい、という3点を考えました。

写真、キャプションを一部楕円形と変形にする、人形など装飾を置く、さらに途中からクイズも作るなどの工夫を凝らしました。展示物の用意には、直筆翻訳原稿や書簡など、貴重な史料をいくつも「村岡花子記念館」からお借りできたのも幸いでした。

学院ホームページでの紹介の他、地域の方たちにも見ていただこう、と3月の「十番だより」にもお知らせを出しました。

このコーナーは本部・大学院棟の利用者以外にはまだまだ隠れた場所なのかもしれず、今後効果的に利用される方策を史料室委員会などで検討していきたいと考えています。

（酒井ふみよ 史料室）



「赤毛のアン」初版本と翻訳原稿



「村岡花子と東洋英和」展示